

戦争をたどる、記憶を継ぐ

全てが戦争に染まった戦時下の日本。その記憶は年月の経過と共にだんだんと、過去のものになりつつあります。世界に目を向けると、さまざまな国や地域で紛争が起き、現代でも「平和」は当たり前ではありません。今号では、安曇野に残る戦争の記憶を紹介し、平和とは何かを考えます。

教室に響く叫び声

穂 高国民学校で授業を受けていた1945年5月19日。当時12歳だった私は空襲を経験しました。

ちょうどお昼になる頃、爆音と共にその瞬間はやってきました。その時の記憶は断片的で、実際は何が起きたのかよく分かりませんでした。気が付いた時には恐ろしさで体の震えが止まらず、同級生の泣き叫ぶ声が校舎中に響いていました。教室の窓ガラスは全て割れ窓枠だけに。割れたガラスの破片は強い爆風に吸い込まれるように校舎の外に飛び散っていました。

爆弾が落ちる少し前、私の父は爆撃地のすぐ近くで農作業をしていました。偶然にも作業が早く終わったので助かりましたが、タイミングが違っていたらと思うとぞっとします。爆弾が落ちた場所付近にいた知り合（、）

Interview —戦争を生きて、見つめて—

安曇野に爆弾が落ちたあの日。



太平洋戦争末期に安曇野を襲った穂高・有明空襲。穂高で空襲を経験した矢口さんに当時の様子や暮らし、今伝えたい思いを聞きました。

いのおばあさんは、足の指がちぎれて入院したと聞きました。その日の夕方、子どもたちだけで爆弾が落ちた場所を見に行くと、幅5メートル、深さ2メートルの穴が空いていました。子どもがすっぽり入るほどの穴で、実際に入ってみると、中はきれいなすり鉢状になっていました。

穴に近づいたことが分かれると両親からは叱られました。遊びに行った訳ではありません。当時、鉄は戦争に必要な武器などを作るための貴重品。物干しざおや鍋はもちろん、たんすの取っ手に付いた金具に至るまで、家中の鉄が回収されて消えていきました。学校でも鉄棒がなくなり、鉄があればどんなに小さくても持つてきなさいと教えられていましたから、爆弾が落ちたと聞いた時、周りに散らばった鉄の破片を拾いに行こうと考えたのです。



たけひこ 矢口 健陽児 さん（92・穂高）

■プロフィール

1933年生まれ。12歳の時に穂高で空襲を経験する。その後は法務教官として少年院・有明高原寮に勤務。30年以上に渡って少年の心に寄り添い、向き合った。

■穂高地区の空襲

1945年5月19日の昼頃、米軍の戦略爆撃機・B29が穂高国民学校（現在の穂高交流学習センター「みらい」）南方150メートルの地点に250キロ爆弾を5発（3発という説もある）投下。3人が重軽傷を負い、家屋にも被害が出た。

戦争一色の暮らし

戦時中、学校ではとにかく体を鍛えることを教え込まれ、国語や算数などの勉強は二の次。敵に見立てた人形の胸を竹やりで突く訓練もしていました。私は体が小さく足も遅かったので「兵隊さんにならないぞ」と言われることもありました。今思えば、とんでもない環境ですが、当時はそれが当たり前。社会全体が戦争に染まり、戦争に突き進むという傾いた考えが正しいことだと信じ切っていた時代でした。

私の父は戦争に行きませんでした。が、父の弟2人は出征し、満州で戦死しています。遺骨を集められなかったのか、戦地から戻ってきた箱の中には代わりに軍隊が作った位牌が入っていました。

ました。6人きょうだいの長男だった私は、父と一緒に田んぼや畑で働いて家を支えていました。私の家は農家でしたから、食べるものは他の家庭より恵まれていたと思います。おなかいっぱいはい食べられませんでした。腹持ちのいいイモや保存のきく豆類を作って家族の食べる食料は何とか確保できていました。

周りには都会から集団疎開して来たり子どもたちもいて、同じ学校に通っていました。彼らは公民館に身を寄せて暮らしていましたが、その暮らしは子どもの私が見ても厳しいものでした。親と離れた寂しさで毎日泣いている子ども、集団の中で一番の大将になろうとしてけんかをする子どもなど、子どもたちなりの人間関係や言葉にならな

い感情をおつけ合っていたことを覚えています。食料は常に足りず、わが家のみそ汁を分けに行ったこともありました。空腹に耐えられなかったのでしょうか、疎開に来た友達と遊んでいると知らぬ間に人の家の畑でキュウリやナスを盗み食いしていることもありました。そして迎えた8月15日。庭で遊んでいると家に入るように言われ、家族全員でラジオの前に正座をして玉音放送を聞きました。

戦争が終わった次の日から、世の中はひっくり返ったように変わりました。昨日まで「兵隊になるために体を鍛えろ」と言われていたのに、戦争が終わった途端、「勉強しなきゃ稼ぐことはできないぞ」と言われるようになったのです。



遭難記念の碑

穂高地区に爆弾を投下したB29はそのまま北上し、有明の新屋神社付近の約200メートル西方に、道を挟んで北に8発、南に4発、合計12発の250キロ爆弾を投下しました。大きな砂ぼこりが巻き上がり、直径10メートル以上のあり地獄のような穴が10カ所くらいできたといわれています。北に700～800メートル離れた旧有明小学校（現在の江戸川区穂高荘）では、授業が終わった直後で爆風に吸い込まれるようにガラスが全て外に飛散しました。

田植えの準備や供出用の野菜などを作るために多くの人が外で働いていたさなかに受けた空襲で、農作業をしていた女性2人が爆弾の破片に当たって亡くなり、数名が重軽傷を負いました。爆撃地とされる場所には遭難記念の碑が建ち、有明地区には爆風で破損した馬頭観音像が残っています。



爆風で破損した馬頭観音像

巡り合った天職 今抱く思い

終戦から数年後に始まった被災孤児が登場するラジオドラマ「鐘の鳴る丘」は毎日聞いていました。当時は犯罪に走る被災孤児も多く、社会問題にもなっていた時代。その放送がとても印象に残っていました。

不思議な巡り合わせもあるので、その後しばらくして、法務教官としてドラマのモデルとなった有明高原寮に勤務することになりました。高原寮では、同じ志を持った熱意ある仲間と共に一人一人の個性を尊重し伸ばすことを重視して少年たちと接しました。戦争を経験しなければ、あの時ラジオを聞かなければ、この道に進むことはなかったと思います。

戦争が終わって80年たちますが、世界中で争いが起きている世界情勢を見ると、私が生きた戦争の時代と重ねてしまうことがあります。大切なことは一つの方向に片寄ってしまう前に、どこかで足を止めて広い目で周りを見渡し考えることではないか――。そんな思いを持っています。

戦争で経験したことは決して忘れられるものではなく、目を背けることはできません。だからこそ、今を生きる皆さんには80年前にこの地で何が起きたのかを知ってほしい。知り考えることで、心の中に込み上げる思いがきつとあるはず。です。

連載 安曇野と戦争の記憶

記憶2 安曇野を襲ったもう一つの空襲